

僕の頭の中のちゃぶ台

ちゃぶ台というものがある。

ちゃぶ台というと昭和の遺物のように見られるけれど、その登場は画期的だった。

ちゃぶ台は戦後復興期から高度経済成長期（一九五〇年代～一九七〇年代）に流行し、この時代のテレビドラマや映画でも頻繁に登場する。日本の家庭文化を代表する家具として定着していた。

そのちゃぶ台のなかに画期的だったかという点、それまでの日本の一般家庭では料理を囲み家族でご飯を食べることが珍しかったからだ。

家族が集まりはするけれど、一人一人に御膳が添えられていた。みんなが集まっているのにある意味個食なのだ。

厳格な家庭では家長の父親が先にご飯を食べて、家族が食べ終えてから母親が食べ始めるなんてこともあった。

現代ではダイニングテーブルが主流だけれど、ちゃぶ台以前の昔はテーブルや台はなく、御膳あるいは御盆に料理が置かれていた。

中心に置く台がないから必然的に輪になって囲むなんてこともない。席は対面か、横一列となる。御膳でご飯を食べるということは基本的立って移動することはない。ごはんのおかわりはおひつ横にいるお上さんに頼むことになるから、おひつのそばは特等席である。席順はそのまま序列

となった。

家長あるいは家督を継いだ父親が上席に座る。上座、下座はこうして生まれたのかもしれない。

しかし、それがちゃぶ台の登場により同じ料理をみんなで取り分けて食べるようになっていった。いわゆる食卓である。

ちゃぶ台の流行は家族間の階層化したヒエラルキーをフラット化し、シェアエコノミーを育んでいった。そこに有機的な家族間のドラマが生まれた。

デザインを変えるだけで行動様式から人間関係までダイナミックに変わる良い例だと思う。

僕の過ぎ去りし昔を思い浮かべると家族でちゃぶ台を囲んで食べた日々が思い浮かぶ。団欒というのはいいものだ。多分僕は最後のちゃぶ台世代だと思う。

ともすると、現代人は目の前に人がいるのにスマホばかりいじりがちだし、会話をメッセージアプリでしがちだ。

便利だし楽ちんだよね。近くて遠い。それがスマホの功罪だ。

それはそれでいいのだけれど、僕としては心配なことがある。

あらゆるモノゴトがスマート化していくと後になにも残らない可能性がある。デジタルってそういうものだ。不変なものとはそれ以外の変化に弱い。

僕にとってちゃぶ台とは「場」だった。

年齢を重ねて、病気をしてみて分かったことがある。過去を振り返った時、いつも背中を押してくれるのは確かな「場」の記憶なのだ。

「場」というのは形がない。具体的ななにかではないし、行為でもない。頭や心の中にある主観的な「記憶」なんだよね。

一度「場」をなくしてしまうと取り戻すことは難しい。意図して作ろうとしてもなかなか再現できない。とてもかけがえないもののなのだ。

僕にとって家族でちゃぶ台を囲んで食べた記憶は「場」となり、今でも強烈な重力を生み出し僕を惹きつけ勇気づけてくれている。

子どもの頃の空想遊びや体験は、大人になってからも自己肯定感を支えてくれる。

記憶としての「場」は過去を振り返った時、「自分は価値ある存在だ」「確かにその場にいた」という感覚を高め、背中を押してくれる。「場」とは自分らしさの「城」であり「聖域」なのだ。

スマート化してデジタルに頼るということは、自分から「場」を失くしたり遠ざけることなのかもしれない。僕はアトムからビット化して行っている。

現代において「場」とは面倒くさいものとされている。会社の飲み会の席、親戚の集まり、町内の清掃、PTA、選挙の投票など、とかく敬遠されがちだよな。

僕は半身不随になって随分と「場」というのは大変面倒なものだと感じた。だってその「場」に行かなければ家電にも触れないのだから。トイレにも苦労する。

しかし、究極にスマートホーム化してみても分かったことは、その行為や経験が「場」として残りにくいことだった。

スマートホームおじさんを自称していてナンだけれど、便利過ぎると経験知として溜まらないんだよね。

本当に便利なんだけれど、振り返った時になにかがスッポリと抜け落ちてしまっている。

それはまるで、結末だけを知っている漫画や小説のようなもので、そこに至るストーリーをまるで憶えていないことに似ている。

アナログ育ちの僕には確かな記憶としての「場」はたくさんある。けれど、生まれてくる子どもたちやスマホやスマートデバイスを使いこなす若者たちが大人になり過去を振り返った時、ちゃんと背中を押してくれる「場」は存在するのだろうか？

過去を振り返ったら、家族みんなが下を向いて指だけを動かしている風景しか浮かばないのだとしたら悲しすぎるだろう。

家族の名言や励ましの言葉がアプリのメッセージだったら味気ないだろう。

残念ながらサービスは終了する。ストレージは壊れるし、クラウドのデータもいつかは消える。

僕らの未来は便利になって行くけれど、同時に大量サ終（サービス終了）社会でもあることを忘れてはいけない。

その時残るのは果たしてなんだろうか？

ステイプ・ジョブズやビルゲイツが自分の子供にスマホを与えていなかったという話は有名な。

幼児期からあえて記憶の中の「場」居場所」を家族で設けることは、今後のトレンドになっていくかもしれない。

未来ではなにかしらの名称が付いていることだろう。

それがどういったものなのかは分からないので、僕は仮に「ちゃぶ台」とか「ちゃぶ台が必要」と呼んでいる。

ちゃぶ台の話でよく勘違いされるのは、「ちゃぶ台なんてもう要らなくないですか?」とか「いまさらなんでちゃぶ台なんですか?」というものだ。

僕は本物のちゃぶ台を食卓に復活させようとしているのではなく、「場」の効力を利用しない手はないと言いたいんだよね。

僕が九〇年代から二〇〇〇年代にインターネットプロバイダと自作DOS/V屋をはじめたことで、僕のお店にたくさん仲間が集まったように、「場(ちゃぶ台)」はビジネスにも繋がるし一生の縁を育んでくれたりもする。もし「リモートで集まりましょう」とやっていたらこうはならなかっただろう。スマートホームにもちゃぶ台のような要素や概念が必要だと感じている。

ちゃぶ台はちよつと不便でちよつとかつこ悪い。はつきり言ってオワコンである。でもそれがいい。スマートという足し算や掛け算が賞賛されがちだけれど、引き算のデザインを成立させることは足し算よりもっと難しい。

便利にし過ぎず、敢えて不便さのザラつきをマテリアルとして与える。それが「場」を発生させる。

技術が進み僕らの存在はあらゆる時間のあるゆる場所に偏在(オムニバス)することになるはずだ。過去を振り返った時、記憶や経験が偏在しているというのは混乱する。ましてや過去が無いなんてことになれば自己肯定感は根底から覆る。

しかし、そこにちやぶ台的なものがあれば僕らはどこにいてもゆるく繋がることができるだろう。記憶の座標のゼロポイント地点。魂のハブ。価値観のポータル。それがちやぶ台なのかもしれない。

【藤川はスマートデバイスにはちやぶ台が必要だと気が付いた】